

Glocal Tenri



月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.11 No.9 September 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

CONTENTS

- ・ 巻頭言
故国への想いの重さ・・・
／深谷忠一 1
- ・ 天理教教理史断章 (57)
庄司家文書②
／安井幹夫 2
- ・ 天理教海外伝道の資料 (9)
上海伝道関連史料⑨
／深川治道 4
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (21)
「偉大さ」のもたらす功罪
／金子 昭 5
- ・ 「二つ一つ」の環境学 (34)
口蹄疫問題で再認識させられた“経済動物”としての家畜①
／佐藤孝則 6
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学 (18)
ハワイ人の表象
／井上昭洋 7
- ・ 現代ジェンダー論展望 (12)
主婦パートを可視化する
／金子珠理 8
- ・ 天理スポーツ (4)
障害者スポーツと天理③
／難波真理 9
- ・ 宗教・国際協力・NGO (21)
一食平和運動の歩み①
／野口 茂 10
- ・ 図書紹介 (55)
Australia and the Origins of Agriculture
／土井幸宏 11
- ・ English Summary 12
- ・ おやさと研究所ニュース 13
研究報告会／大阪希望館1周年記念集会以講演／
リュブリャナ出張報告／公開講座「死生観と超越」
に参加／第47回社会福祉セミナーに参加

巻頭言

故国への想いの重さ・・・

おやさと研究所長 深谷忠一 *Chuichi Fukaya*

アメリカ伝道庁長就任奉告祭参拝のために久しぶりに渡りました。奉告祭の様子は天理時報等で報じられているとおり盛大なもので、小生の教会関係者や学生時代の旧友も大勢参拝してくれました。

伝道庁長の祭文奏上や式後の挨拶も英日両語でなされ、また、直会などの進行も主に英語で進められました。だんだんと英語が母国語の若い力が育っているようで、これからは楽しみだという思いになりました。しかるに、一方では、“私の顔分かる？僕のこと覚えている？”との言葉が飛び交い、30年ぶり、40年ぶりに会うなつかしい顔々、アメリカの道の先達たちとのうれしい再会もたくさんありました。

奉告祭の翌日の夜には、50年前のハイスクール時代から交流が続いている日系の友人たち4人が集まって、歓迎のホームパーティーをしてくれました。大学を卒業してから皆が一同に揃うのは何十年ぶりのことでしたが、「やあ、やあ」と挨拶をかわしたら、すぐに昔のお互いどうしに戻りました。

家族のこと、健康のこと、ゴルフのこと、旅行のこと等、60代の老人たちの話題が一回り出尽くした後の話題は、彼らが毎日欠かさず見ている日本のテレビ放送の番組についてでした。“僕は7時のNHKのニュースは絶対に見逃さない”“俺は大河ドラマと相撲は欠かさず見ている”“家では家内が朝からずっと日本語放送を録画している”等々、如何に自分たちが熱心に日本のテレビ番組を見ているかを競うように話すのです。

4人のうち2人は帰米二世、2人は元留学生、また、奥さんも二世と一世が2人ずつという違いはありますが、皆さん15、6歳からアメリカに住んで50年。同じイーストロサンゼルスハイスクールから苦学して大学を卒業した仲間です。そのうちの一人は大手会計事務所のパートナーの公認会計士、一人は世界一の消費材メーカーの部長、一人は航空機製造会社のレーダーの設計技師、そして、会社経営コンサルタントと、それぞれにアメリカ社会の中で活躍して、功成名を挙げたとと言える人たちが

す。もちろん英語にも不自由がなく、日本語でなくてもテレビやラジオを楽しむことができます。また、みんな毎年のように仕事や遊びで日本を訪れてもいますから、東京の街の様子などは小生などよりずっと詳しいのです。

それでも、日本からのテレビ放送は一日たりとも見逃すことができない。それも、アメリカのテレビ局が流す日本のニュースではなく、日本の放送局が日本で放映しているものを見なければ落ち着かないのです。その奥にあるのは、留学生や駐在員などのホームシックなどよりずっと深いふるさとへの憧憬であり、それは、彼らのアイデンティティーを確認する営みそのものでもあるのです。

彼らはアメリカ社会から疎外されているのではなく、それなりにアメリカンドリームを享受している人たちです。しかし、それでも、日本のふるさとにある自分のアイデンティティーの根元を、根こそぎ彼の地に移植することはどうしてもできない。逆に申せば、幼少年期を過ごしたふるさとが、日本に確かにあるからこそ、安心して今の生活を続けられるのです。

小生の知る1960年代以降でも、お道の布教師が大勢渡りましたが、その中で現地の高等教育を受けられたのは限られた人でした。ですから、彼らの中には、所謂アメリカ社会に入り込めずに、40年、50年を日系社会の中で過ごさざるを得ない人も多くありました。アメリカ社会で成功して、その豊かさを享受している人でも日本が恋しくてたまらないのですから、アメリカに移住しながらアメリカ社会の本流に身をおけなかった人たちのふるさと日本への想いは、どれだけ重いものでありましょう。

「海外布教を志す者は、目指す国の土になる覚悟が必要だ」と口で言うのはやさしい。しかし、布教師がふるさとへの思いを振り切って外国の土になるためには、故国に住む者には想像できない重い気持ちを越えなければならないのです。そのことに、布教師を送り出した親元がどれだけシンパシーを持てるか？それが海外布教進展のための重要なカギの一つだと改めて思った今回のアメリカ訪問でした。